

小学校6年間の生活記録を用いた学校生活イメージの検討

—子どもは小学校生活をどのようにとらえていくのか—

吉川はる奈*

キーワード：生活記録、生活実態調査、家庭、小学校、子ども、6年間

問題と目的

子どもは自らの小学校生活をどのようにとらえているだろうか。また小学校生活は、その後の成長過程において、子どもたちにどのように意味づけられていくのだろうか。

小学校は、幼稚園・保育所に続く、家庭とは異なる社会集団の1つとして、子どもが社会の一員として育つ際の大きな役割を担う場である。また小学校は、幼稚園・保育所とは異なる学校教育の場でもあり、新たな知識を得られる、知的な発達を促す場でもある。

昨今の子どもをめぐるさまざまな問題提起の中で、子どもが学校をどのように感じているかということが問われる。その中で「友達関係で傷ついた」、「勉強がわからず苦痛だった」、「行事が多く忙しくて大変」などと学校生活がマイナスイメージで表現されることも多い。

小学生を対象にするという方法論上の難しさもあり、小学校生活を子どもがどのようにとらえ、その後の成長過程でどのように意味づけしていくのかについては、あまり検討されてきていない。

本稿では、子どもが小学校生活を成長過程でどのように捉え意味づけしていくのかについて、

方法論の検討とともに明らかにしていく。

1. 1年生にとっての小学校生活

吉川ら(2006)は1年生が小学校という新たな場に適応していく過程について長期間の観察とインタビューを用いて検討している。そこでは、幼稚園から小学校という異なる場に適応していく際に、多くの戸惑いと混乱を感じ、つまづく姿とともに、子ども自身のさまざまな能力の成長と、クラス集団の力の高まり、学校生活内での担任からのさまざまな働きかけを支えに、子ども自身が生活を見通すことができるように成長していくプロセスを明らかにしてきた。学校適応の研究の多くは、小学生特に低学年の場合、子どもの視点で学校生活をとらえるということは、子どもの言語理解や言語表現の未熟さもあり、研究手法上の難しさをともなう。このため、学級担任へのアンケート調査が多くなる。そこで学級担任へのアンケートではうかがうことのできない、子どもの視点から考察するために、観察と担任へのインタビューを用いた。しかしながら、1年生が学校に適応していくプロセスは明らかになったが、子ども自身が小学校生活に対してとらえていること、感じているイメージにつながるような「どんなことが楽しかったか」「どんなことをがんばったのか」「どんなことがつらかったのか」などは、観察と担

* 埼玉大学教育学部家政教育講座

任へのインタビューでは明らかにすることはできなかった。

2. 対人関係が苦手な子どもたちへの取り組み

小学生を対象にした、学校生活満足度調査の中で、鍋島（2005）は高学年では女子を中心に友達関係の複雑さなどから一時的に学校生活を肯定的に捉えていないことを報告している。対人関係が苦手である小学生の問題は、多くが指摘するところであり、学校満足度のほかにも、日々の学級運営に与える影響力も大きく、小中学校においてさまざまな対応がなされている。さらには、小中学校に限らず幼児期の子どもにおいても、「友達とけんかができない」と保育者を中心に対人関係の苦手な状況を危惧する声は高く、問題への対応も幼児期から長期にわたって必要であるといわれている。

このように相手の立場にたつこと、相手の気持ちを理解することなど、人間関係の力が未熟な子どもたち、児童生徒の問題が保育現場、教育現場で指摘されているものの、原因を1つに特定することは難しいこと、入学前はもとより入園前から友達関係を豊かに経験していないこと、兄弟も少なく異年齢の関係も経験していないこと、加えて家庭の育児力、教育力の低下がめだつこともあり、対人関係を体験的に幼稚園や学校で学ぶという試みへの期待は大きい。具体的には、異年齢交流として、小学校と幼稚園でのあいだの交流を実現させ、幼児も小学生も異年齢交流を経験する中で、それぞれの役割を学び、対人関係の幅を広げることをめざす取り組みもある。また子育て支援活動の中での地域との交流や学年をこえた交流など異年齢の交流、異世代の交流もあり、一定の効果が報告されている。

このように学校がもつ本来の機能だけではない、より多くの機能が求められている現状がある。では、このような学校に対して、子どもはどのような学校生活イメージをもつのだろうか。高学年の友達関係が複雑になる時期は、つらい

という場でしかないのだろうか。

また、つらいというイメージばかりが、子どもたちにとらえられていくのだろうか。

はたして、子どもは発達・成長とともに学校生活をどのようにとらえているのだろうか。

3. 小学校生活を子どもはどのように感じているか

吉川ら（2005）は、小学生の生活実態調査を継続して行っている。具体的には、学校生活に限らず放課後の時間も含めた子どもの生活を明らかにした上で、現代の子どもの成長・発達をうながす支援に何が必要か、そのために学校教育において、地域においてできることは何かを明らかにしたいと考えている。学校外の生活においては、子どもの生活習慣や遊びに関することがらを調査することを通して実態を明らかにしてきた。一方で、現代の子どもが学校生活をどのように感じているのかを子どもの視点でとらえることの必要性も示唆された。子どもの生活は家庭生活だけでなく学校生活もふくめた子どもの1日全体を捉えなければ、生活の実態に迫れないからである。

筆者を含む石出ら（2005）は卒業したばかりの12歳児に6年間の小学校生活をどのように感じているかについて、小学校での生活を生活記録として、子ども自身に記述をしてもらい、記述の特徴をまとめた。さまざまな6年間の経験が記述されたが、経験したことや感じたことを言語で表現することの難しさもうかがわれた。

それをうけて本研究では、彼らが成長した6年後の年代にあたる大学生を対象に、彼らの小学校生活をふりかえることによって、6年間の小学校生活を記述してもらい、記述の内容を分類し検討する。

さらに、「12歳児」がとらえていた小学校生活と、「その対象児童が成長した世代にあたる大学生」がふりかえりによってとらえる小学校生活との記述内容の比較検討を通して、方法論の検討とともに、子どもが成長・発達とともに小

学校生活をどのようにとらえ、どのように意味づけていくのかについて考察する。これらを通じて、学校生活だけでなく学校外の生活を含めた子どもの生活全体の中で、豊かに発達をうながすための支援のありかたについて示唆をえたい。

方法

1. 対象

ふりかえりによる小学校の生活実態調査に参加した学生120名のうち、「生活記録（自由記述回答）」に対して有効な回答があった115名（平均年齢18歳7ヶ月）

2. 方法

(1) 小学校6年間でふりかえり記述した、小学生生活6年間の「生活記録」（自由記述ふくむ）のうち、以下の3項目に関する記述実数について検討した。

3項目：①うれしかったこと、楽しかったこと（以下うれしい・楽しい）②が

ばったこと（以下がんばった）③つらかったこと・悲しかったこと（以下つらい・悲しい）

- (2) さらに、上記の3項目について、表1の基準で分類し、検討を加えた。
- (3) また対象学生が小学生であった時期の12歳児を対象にした同様の生活実態調査の結果と比較検討する。

結果

(1) 項目の学年別記述実数 表2

表2は上記3項目の学年別記述実数をあらわしたものである。

「うれしい・楽しい」項目、「頑張った」項目は、「つらい・悲しい」項目よりもすべての学年において、記述実数が多かった。

またこの特徴は、大学生のふりかえりにおける小学校生活実態調査だけでなく、12歳児の記述による小学校生活の実態調査でも同様の傾向であった。

(2) 各項目の分類基準による学年別記述傾向
上記表1の分類基準によってえられた、学年別の記述の傾向を、それぞれ「うれしい・楽しい」項目を図1に、「頑張った」項目を図2に、「つらい・悲しい」を図3に示した。これらによれば、「うれしい・楽しい」項目、「頑張った」項目は、学校生活に関する記述が多く、勉強、運動、行事に関する記述が多かった。一方で、「つらい・悲しい」項目は人間関係、中でも友達に関する記述が多かった。

表1 分類基準

| | |
|------------------------------|------|
| 人に関する記述 (教師・友達・家族) | 人記述 |
| 学校に関する記述 (勉強・運動・当番・課外・行事) | 学校記述 |
| 学校外に関する記述 (勉強・運動・趣味・遊び) | 校外記述 |
| 家庭に関する記述 (勉強・運動・趣味・遊び) | 家庭記述 |

表2 学年別記述実数

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 計 |
|----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| うれしい・楽しい | 121 | 133 | 124 | 129 | 127 | 136 | 770 |
| 頑張った | 88 | 93 | 104 | 121 | 122 | 130 | 658 |
| つらい・悲しい | 68 | 75 | 66 | 75 | 68 | 75 | 427 |
| 計 | 277 | 301 | 294 | 325 | 317 | 341 | 1855 |

「頑張った」項目は、学年があがるにつれて、学校記述が増えていき、一方で、家庭記述は学年があがるにつれて減少していった。

(3) 12歳児による記述と18歳児による記述内容の比較

大学生の記述では、学校記述が全体として多くを占める。中でも、行事や勉強、運動に関するものが多い。そして、その中で大会への参加

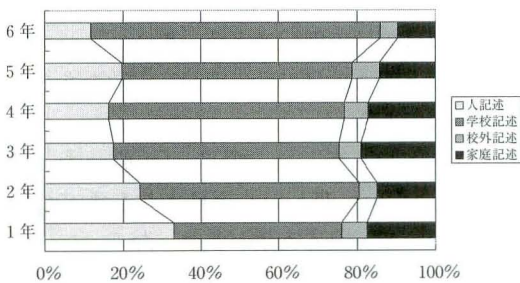


図1 「うれしい・楽しい」項目での記述の学年推移

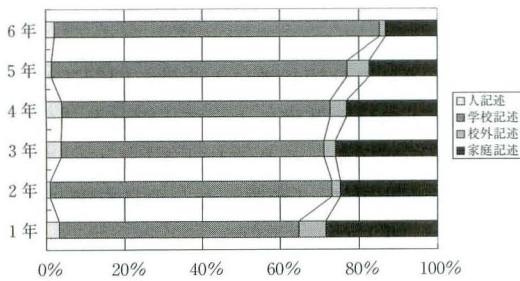


図2 「頑張った」項目での記述の学年推移

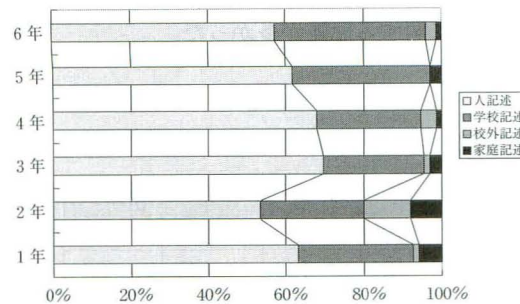


図3 「つらい・悲しい」項目での記述の学年推移

や入賞、さらにそれにいたる準備や練習のプロセスへの記述が多い。一方12歳児は、学校記述が多くを占めるものの、具体的な記述の内容は、結果のみが単語で書かれていることがほとんどである。

18歳大学生の全体の特徴としては、結果だけでなくプロセスを明確に記述した上で、その過程で自分が抱いた感情を丁寧に表現するものが目立った。

一方、石出ら(2005)による12歳児の記述では、「うれしい・楽しい」は1年生では友達に関する記述を中心に「人記述」が多く、学年があがると「学校記述」がふえた。また「がんばった」は「学校記述」がもっとも多く、やはり行事や勉強、運動に関するものが多い。さらに「つらい」は「人」記述が半数をしめていたと報告している。

したがって、大学生のふりかえりにおける小学校生活実態調査の記述の内容は、12歳児による小学校生活の実態調査でも同様の傾向であったといえる。

(4) 記述の実例

次に、ふりかえりによる小学校生活記録の記述実例を表3に示す。

小学校を卒業して6年後にあたる大学入学直後の5月に、6年間の小学校生活をふりかえり、生活記録を記述したものである。実例にみるように、かなり詳細に、がんばって取り組んだプロセスが記述されている。たとえばK子は、チャレンジして継続して練習した中で得た結果について、詳細に記述している。1年生の一輪車の挑戦も「何とか乗れるようになって」という思いとともにふりかえている。運動会の鼓笛隊でがんばったことも「疲れた」という表現とともに、「がんばった」記録として記述している。また、6年生では体操クラブでさまざまな技に挑戦してがんばったが、バック転だけはできなかったということもふりかえる中で

表3 ふりかえりによる小学校生活記録の記述実例

| | | K子 | | | B男 | |
|----|---------------------------------------|---|------------------------------------|--|--|---|
| | うれしい・楽しい | 頑張った | つらい・悲しい | うれしい・楽しい | 頑張った | つらい・悲しい |
| 1年 | 帰り道などいろいろなお花をつんだり、草笛で遊んだこと | 1輪車にのれるようになりたくて毎日のように練習し、乗れるようになった。 | 仲の良い4人組が度々けんかをした | オリエンテーリングで学外をたくさん歩いたこと | 持久走大会で1年生男子の部で10位になり、賞状をもらったこと | ちゃぼの絵のクレヨンでの色付けがうまくいかなかったこと |
| 2年 | 放課後はいつもの4人で近所を冒険したこと | 休み時間の度にうんでい遊び、手にマメができ、つぶれるまでやり続けた | 悪ふざけがすぎ、クラスの男の子を怒らせたこと。 | 遠足で動物園に行ったこと。バス、電車を使って。 | 図工で自分の紙人形を完成させるのになり頑張った | ともだちが運動神経がよく、放課後のバスケットではシュートきめ遊びでいつも負けた |
| 3年 | 新しい家になり自分の部屋ができたこと | 進研ゼミをはじめて家で勉強するようになった。 | 転校して前のように近所で遊ぶ友達がいないかったので、家で遊んだ | 担任の先生が昨年と同じだったこと。 | 算数のテスト、文章題を何とかして解くのがんばった | 体育でいつもやるドレミファ階段というのが、いつもほくだけできなかった |
| 4年 | 鉄棒の授業で私は体操クラブに入っていたので難しい技がたくさんでき得意だった | 鼓笛隊を運くまで練習し運動会で疲労した | 前の学校での友達との文通がとぎれたこと | 隣のクラスの子と仲良くなった。プールが同じだった。 | 地区の学校対抗の合唱祭り | クラス内で一時期孤独なときがあった。 |
| 5年 | クラス替えて新しい友達がふえた。犬を捨てて飼いはじめた。 | 難しいピアノを発表会に弾くために練習した | 4年生まで一緒に帰っていた友達が違うクラスになり、ひとりで帰ったこと | 地区の連合運動会でボール投げ部門でぎりぎり10位入賞した。 | 自学という制度で、星についてとか、神話についてとか勉強した(自分でテーマを決めて勉強、提出、ポイント制) | 林間学校でちょっとけんか |
| 6年 | 飼っていた犬が子どもを産みかわい子犬とたくさん遊んだ。 | 器械体操のクラブにはいっていたのでいろいろな技に挑戦したが、バック転だけはできなかった | バスケの授業のときに、バスをとりそこねて小指を骨折したこと | 理科のテストで3枚戻ってきたとき全部100点でほめられたこと。日光にいった修学旅行。 | 卒業式の日に歌の伴奏をさせてもらったこと | 友達とのいざこざ |

の記述で明らかにしている。

一見すると、入賞した、優勝した、できるようになったなどの「輝かしい」結果がふりかえりでの小学校生活記録に記述されるように見えるものの、詳細にみていくと、結果よりもそのプロセスが丁寧に記録されていることがわかる。

また「つらい・悲しい」記述はK子の記述やB男の高学年での記述のように、友達関係をめぐる「人記述」がめだつ。一方、低学年では、B男2年生の「バスケットでいつも負けたこと」や3年生の「体育の種目でほくだけできなかった」のように、「できない」という結果について記述しているものもある。しかし、高学年になると「できない」結果に対して「つらい・悲しい」と記述するものはほとんどいかなかった。

考 察

1. ふりかえりによる小学校の生活記録を記述する方法論の妥当性

小学校を卒業して6年後にあたる学生が、みずからの小学校時代の生活記録を記述することの妥当性についてふれる。6年後のふりかえりによる記述は時間が経過している内容という見方もあるだろう。しかし、多くの学生は6年前までの自分をふりかえり、一気に生活記録を記述していた。学年ごとの記録もそれぞれのエピソードを記述している。かなり、詳細に小学校時代のエピソードとして捉えているものを記述しているという様相である。

さらに小学校を卒業したばかりの12歳児が記述した内容と分類上は学年推移が同様の傾向となった。これは、小学校生活をどのように捉え

るかという部分で、年齢推移に影響を受けずに学校生活イメージとして持ち続ける部分とも考えられる。

12歳児はキーワードのように、単語で記述し（たとえば、運動会の鼓笛、発表会の伴奏など）、大学生は、そのキーワードにいたるプロセスや、結果、その思いをあわせて記述している（たとえば、難しいピアノの曲を発表会で伴奏するために練習したこと）。分類の学年推移は同様の傾向であることから、小学校の生活記録として両者の内容は大きな差はなく、記述の特徴は年齢差による言語能力差によるものであることが推測される。

優勝する、勝つ、一位になるなど、結果として「うれしい・楽しい」あるいは「がんばった」という記述だけでなく、結果としてうまくいかなくても、「いろんな技に挑戦した中でバック転だけはできなかった」という経験や、「疲れた」と表現するほど「毎日遅くまで練習した運動会の鼓笛隊」という経験は、結果よりもそのプロセスが貴重な経験になっている。小嶋（2006）は、何か意味のあるものを生み出す営みに直接的に参加しているという実感を欠いた少年は、自分を社会の中に位置づけて確認するのは難しいと指摘する。逆に明確な目的意識の中で、「* * * になりたい」、「* * * ありたい」という自分にとって意味のある目的意識を位置づけ、それをめざして参加することは、自分をしっかり社会に位置づける、忘れられない確かな経験になるはずである。生活記録で多くを占める学校記述には、学校での行事や勉強、運動など、子どもがまさに目的意識をもちながら取り組むことができる自分にとって意味のある経験である。このようなプロセスに相当するものこそ、6年間の「生活記録」として残るものであり、6年後であっても、ふりかえりによる生活記録において記述される内容であると思われる。

2. 子どもにとって小学校生活とは何か

多くの学生が、小学校生活を肯定的に捉えて

いた。勉強や、運動、行事を楽しむ姿が記述されていた。学校生活において、人との関係が重要な要素だとされるが、それだけでなく、課題を達成するような喜びや行事を通して経験する楽しさなど、学校の機能が再確認されたともいえる。

「頑張った」項目には、「算数の九九」や「自由研究」「マラソン」「学芸会の練習」「鼓笛の練習」など、勉強、行事などに関する記述が目立った。低学年では、「つらい・悲しい」のなかに、「できない」自分に対して「つらい」と記述している例もあったが、中学年以降は、「できなくても」「がんばる」ことで、「つらい・悲しい」ことではなく、「頑張った」中で「うれしい・楽しいこと」に変えていける力も持っていることがうかがわれた。しかし一方で、朝永の報告によれば、小学生、中学生、高校生の生活実態調査から、特に小中学生は、学習の取り組み方の様相と親子関係、いわゆる会話量との関係をみると、親との豊富な会話やそれが可能な環境は知的好奇心が育まれる土壌として大切であるという。

つまり、「つらい・悲しい」を「がんばった」経験を通して「たのしい・うれしい」にしていくためには、そこで関わる大人の働きかけの質についても、今後は明らかにしていく必要があると思われる。

3. さまざまな感情を経験する場として

「つらい・悲しい」では、学年に関係なく、全体的に、対人関係に関する記述がめだつた。小学生は低学年から高学年まで、友だち関係の中で「つらい・悲しい」経験をしているということは、確かに否定できない。しかし記述数全体としては、「つらい・悲しい」の記述は少なかった。つまり「つらい・悲しい」経験とともに、あるいはそれ以上の機会を「頑張った」経験や「うれしい・楽しい」経験をしているということである。

低学年の時期には、「できない」自分を「つら

い」と感じている子どもが、高学年で「できない」ことを「がんばって」取り組み、「つらい」ではなく、「がんばった」項目や「うれしかった」項目に記述している例もある。

昨今の子どもたちに関する問題提起の中では、「つらい・悲しい」経験はできるかぎりなくすほうがよいという指摘もある。一概には言えないが、さまざまな感情の経験をする中での「つらい・悲しい」経験であることを本研究での記述は表していた。「つらい」経験数より多く存在する「がんばった」や「うれしい・楽しい」経験こそ、積極的に活かす取り組みが大切であると考え。また記述内容は、単に結果ではなく、経験していく過程にふれていたことから、教師の側からも子どもの経験のプロセスをイメージしながら働きかけていくことも大切であると思われる。

4. 今後の課題

小学校卒業後のふりかえりデータとして、6年後だけでなく、2年後、4年後と詳細に経過を明らかにしていくこと、母集団の幅を広げていくことなど、今後の課題である。

引用文献・参考文献

- 吉川はる奈、上野彩、船山徳子（2006）小学校1年生の学校生活適応に関する研究～幼稚園から小学校への移行をめぐる問題への考察～ 埼玉大学教育学部紀要
- 文京区 文部科学省研究「幼稚園における子育て支援活動総合推進事業」報告書
- 戸塚 智（2003）6年間の生活をふりかえって モノグラフ・小学生ナウ vol23 p15-20
- 吉川はる奈、重川純子他 文部科学省平成17年度科学研究費補助金活動報告書
- 石出晶子、鈴木宏子、吉川はる奈他（2005）12歳児がとらえる小学校生活 日本発達心理学会第16回大会発表論文集
- 青木省三（2005）人生における小学校時代 特集学童期の育ちをどう支えるか そだちの科学4 p2-5
- 西田 篤（2005）友だち・けんか・いじめ 小学校という空間 そだちの科学4 p77-82
- 小嶋秀夫（2006）親と家庭の教育力 教育と医学9、p4-12 慶応大学出版会
- 朝永昌孝（2005）学習の様子と親子関係 第1回子ども生活実態基本調査報告書 研究所報 vol33 ベネッセ教育研究開発センター

(2006年9月27日提出)

(2006年10月13日受理)

A study on acquiring process of elementary-school-life-image

Haruna YOSHIKAWA

This study focuses on imaging process of elementary school life.

The descriptions of six-years-school-life at 12 years old and 18 years old are analyzed from the view point of joyfulness, effort and hardship.

The following results: (1) both 12years old and 18years old give their record joyful events item and effortful item more than hard item. (2) they give record about joyful item of school for the higher classes more than the lower classes. (3) they give many records about hard item of friendship from lower classes to higher classes. (4) 18years old students give record about their joyful and effortful item how but what they cope with elementary school life.